

る。名前は、左隣に住んでいたキャリアウーマンで、日本のことが大好きなエリーさんにちなんだ。エリーは四十五キロの大型犬で緋金色の毛並みが美しく、人懐っこく、愛嬌があり、家族の誰かが困っていると駆けつけてくれる子だった。この子は私と定綱と特別な関係となった犬なのだろう。私は一日二回散歩し、よくエリーを枕にして寝ていた。定綱もエリーと仲が良かったが、どうも順位争いで破れたらしく主従関係はやや壊れていた。私の十代の記憶のほとんどにはエリーの笑顔が添えられている。私も定綱も制服にエリーの毛をたくさん付けて登校していた。

当時、幸綱は早朝にジョギングをしていた為、エリーとロツタを連れて走りに行く事も度々あった。

・霜の原にゆまりつつロツタ風の来るかな
たに春を嗅ぎ当てにけり 『吞牛』

・冬の水より顔あげてくるエリー三十五キロの水脈をひろげて

・さむがって泳がぬロツタびしょ濡れのエリーの白き息を見ぬふり

・夏川を泳ぎ来しエリー水光る裸を見せて
岸にあがるも

そういえば「エリーの散歩や排泄とジョギングのペースが合わない」と父が愚痴を漏らしていたのを覚えている。性格の違う二匹だったが「心の花」の編集校正の際は我が家の賑わいが嬉しかったらしく、机の下で場を共有していた。また、動物が苦手だった祖母由幾が、自分に寄り添うエリーに心を開き「あなたは抒情的な顔をしているわねえ」と撫でていたのを思い出す。エリーはその大きさと優しさと引き換えに九歳で逝った。その三年後にロツタが亡くなった。大学生の私と、高校生の弟にとつての初めての家族の死となった。

ロツタが亡くなって八年。私が結婚で家を出て、定綱が一人暮らしを始めようとした佐佐木家の巣立ちの時期、我が家に来たのが雄のイングリッシュゴールデンレトリバーのテオである。やはりオランダつながりでゴツホの弟の名前を貰っている。濃厚なエリーの面影をどこかに追って迎えた犬だが、雄と雌の違いなのか個性の違ひからなのかひどい暴れん坊だった。嘔み癖がなかなか直らず、「心の花」編集校正日は助走をつけて一番手前で作業をしていた高山氏や経塚氏に体当たりし、女性のスカ-

トは発狂するほど大好きで闘牛のごとくひらめきに突進して齧ったりめくったりして歓迎した。(母がブリーダーのもとに返すかどうか悩んだほどだった。)

テオと最初に特別な関係になったのは私だと思ふ。妻のイタリア留学が入ったのを良いことに私は佐佐木家に入り浸りテオと遊んでいた。幼犬の頃のテオは目を覚ますと、寝そべったまま勢い良く尻尾を振り、バタバタとカーペットを打ち鳴らすのを楽しんでから起床していたのが印象に残っている。朝が来たことを喜んでいいのか、存在を喜んでいいのか、尻尾の真意は不明だが命を得て数ヶ月の存在の寝起き姿は感動的だった。また、テオは自分で先陣を切って歩きたがる子だった。草いきれを抜けた先に広がっている彼の知らない世界。新しい世界にワクワクしている背中が逞ましかった。

妻の帰国後、私は実家に帰る機会が減ってしまった。ドアを開ければテオは今でも大歓迎してくれるのだが、以前の熱量とは少し異なる。おそらく幸綱と朋子と特別な関係を築き直したのだろう。私はその関係を少し羨ましく眺めている。